

第七回「群黎賞」発表

第七回「群黎賞」受賞作

予選通過作

・ しおせとくや「光が丘公園案内」

・ 高良真実「伝道」

正賞＝賞状及び佐佐木幸綱歌集『群黎』

副賞＝ボールペン及び選者三名により寄せ書きの色紙

選者賞＝各選者より記念品

選考委員（選者）

佐佐木頼綱、佐佐木定綱、水口奈津子（前年度心の花賞受賞者）

選考過程

① 本年の応募総数は全三十六作（内、メールにて二十三作、

郵送十三作）

② 全作品より各選者が三点五作、二点五作、一点十作を選

び、七月十九日にオンラインにて一次選考会を開催、合

議の上、十九作を一次選考通過作とした。

③ 予選通過作を対象に各選者が上位三作を選び、八月二日にオンラインにて二次選考会を開催。票の重なった作品を中心

に合議。最終的に二作に絞られ議論がされたが、両者に甲乙が

着け難く二作品を群黎賞とした。同時に選者性も決定した。

倉石一郎「老師とバッタとヤモリとカマキリ」

○国兼麻貴「Tokyo」

◎高良真実「伝道」

斎田眞希「水菓子」

○吉見恵美子「頬とさかむけ」

アダムス理恵「緩んだブレーク」

青山哲也「5.01」

長沼通郎「白に近づく」

伊藤亮太「無題」

北見典子「幸せもらう」

柴田麻衣「茜の空に」

鴨山順子「家族の軌跡」

小宮教子「ロタ・ブルーの海」

○雨雨雨汰「暗き階段」

坊真由美「冬の火の鳥」

高西芳弥「無題」

福田樹生里「無題」

◎しおせとくや「光が丘公園案内」

南ゆき「無題」

光が丘公園案内●しおせとくや

曠夜の赤塚口に開きたる暗きさくらのゲートをくぐれ

蒲公英の花の閉じゆく原っぱにトロンボーンを吹く男来つ
行春のあけばの橋ゆ見下ろせばひたひたひたと薦の押し寄す

家々の湯のにおいする牛房口今年もしやがの花が群れいる

金網のフェンスの上でかなへびを尾まで味わう嘴太鴉

向日葵が並び咲きおり頑なにテニスコートに背を向けながら
バス停はメタセコイアの銅の針の葉の降る下にあります

渋すぎるラインナップの自販機を風吹くたびに撫ずる秋桜
敷石の太陽系図どんどんりが土星に落ちて跳ね返りたり

北風が滑走路跡を真っ直ぐに吹くらしふニール袋飛び行く

スケボーの跳ぶ音絶えて月高く冴えにけるかも噴水広場

阿の光が夜をくりぬいてニットキャップの将棋指し見ゆ

恋歌を詠わせたまえ昼も夜も梢まで添うめおとユリノキ

図書館を崇むるごとく踊りいるジャージの二人ガラスに映る

こうこうと光る廊下の裏を行けば夜の団地の窓側暗し

受賞の言葉——しおせとくや



光が丘公園は、東京都練馬区光が丘、旭町、板橋区赤塚新町にある都立公園です。旧陸軍の飛行場として出発し、米軍の居住施設だったという歴史はあるものの、私にとっては「近所の大きな公園」です。休日には多くの人で賑わっていますが、私が親しみを覚えるのは、この連作の題材にしたような空間です。この度は群黎賞という素晴らしい賞に選んで頂き、ありがとうございます。数年前まで書店に短歌の棚があることすら知らなかつた私が、落ち込んだり喜んだりしながら、歌の勉強を続けられているのは、歌会やその他の場所でお世話をなっている皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。

伝道●高良真実

はちみつのやうに夕陽も垂れこむる祖父母の家に祖父は一人なり
昼食よりしばらくを経てうどん朽つる胃はほとほと棺桶ならむ
アイロンは銀色のまま深々とため息ならずスチームをはく
仏壇といふ両親と祖父母との宗教もありしばし手伝ふ

口移し続くうちに念佛が虫歯のやうにエイサーとなり

言葉尻 空也の口を離れゆく六つの仏 六つのおしり

仏壇の蠟燭を器もて覆ひ線香のくさめもよほすに耐へ

一族の墓と位牌は親機・子機のごとくも離れ手を合はせをり

被写体として笑ひ、ピースと、何度かのはいチーズとに息を止めけり
使ひ古しのいのちを丁寧に洗ひほかほかの祖父が風呂場より出づ
エイサー来て隣近所も集まるにみなシャンプレーのかをりするなり
頑強なる青年会の道化師^{チヨンダラー}の白足袋が爆竹を踏み鳴らす

骨と皮 バーランク¹
手太鼓はそこそこの音してバチに打たれ続くも

弥勒菩薩はミルクと訛りましろなるお面のミルク神あゆみ来る

キリストンごころは置いてふるさとの異教踊りにそつと交じりき

受賞の言葉——高良真実

『群黎』（一九七〇）卷頭には主題制作の数少ない成功例である「動物園抄」が納められています。この連作が象徴するように、「群黎」は政治の季節を代表する歌集として知られています。

群黎賞は、入会三年以内に応募可能な竹柏会の新人賞として、現主宰者の第一歌集にその題を求めたのでしょうが、私はそれ以上の何かを考えたいと思つています。啄木以来、近現代短歌史の滅亡論は抒情からの離陸を語つてきました。その糸口の一つに社会詠があります。政治の季節なきあと、私は社会詠を宗教という側面から考えてみました。

